

研 究 分 野	増養殖技術	部名	磯根資源部
研 究 課 題 名	尻屋磯根資源調査		
予 算 区 分	水産基盤整備事業費		
試験研究実施年度・研究期間	S57～H20		
担 当	藤川 義一		
協 力 ・ 分 担 関 係	尻屋漁業協同組合、尻屋漁業研究会、むつ水産事務所		

〈目的〉

尻屋沿岸の磯根資源の状況を把握し、造成漁場を含む地先漁場の管理に資する。

〈試験研究方法〉

平成20年6月10日に、太平洋に面する尻屋沿岸に15調査線を設け、各々の水深2.5m、5m、10m、15m、20mにある計66調査点に潜水し、海藻を50cmまたは1m四方の枠で1枠分、底棲動物を1m四方2枠分採取し、種ごとに個体数と湿重量を求めた。底棲動物のうち、エゾアワビについては殻長を測定するとともに、貝殻螺頂部分の着色から人工種苗を判定した。調査線1、4、7、9、13、14から採取されたキタムラサキウニのうち、漁獲サイズにある計160個については、生殖腺重量、身入りを求めた。

〈結果の概要・要約〉

2年目マコンブ

2年目マコンブは、調査線4の水深5mの1地点でのみ採取された。平成20年（2008年）の生育密度は過去10か年では平成12年（2000年）、平成15年（2003年）、平成17年（2005年）と同様に低く、昨年に比べ1/76に留まった。このため、本年のマコンブ漁は不漁が懸念された。

1年目マコンブ

1年目マコンブは、生育密度が平均28.8本/㎡で昨年に比べ6.8倍高かった。生育密度は浅所で高く、水深5m、10m、15mではそれぞれ56本/㎡、31本/㎡、32本/㎡であった。このため、来年のマコンブ漁は平年並みの漁獲が期待できた。

エゾアワビ

エゾアワビは、調査地点全体の28%に相当する19地点から38個体採取された。生息密度は昨年に比べ27%低い0.3個/㎡で、浅所ほど高かった。殻長9cm以上の個体は、昨年に比べ4%少なく、殻長9-10cmの個体が減少した。一方、殻長9cm未満の個体が半数を占め、来年以降の漁獲の加入が期待できた。藤石崎から北よりの海域やアタカ島周辺では高密度で生息し、それぞれ60トン、100トンの資源があると考えられた。放流貝の占める割合が52%と高かった。

キタムラサキウニ

キタムラサキウニは、全体の89%に相当する59地点で採取され、生息密度が平均3.1個/㎡、現存量が平均229g/㎡と高い値が維持された。水深15m以深では殻径40-50mmの小型個体が多く、資源の加入が考えられた。身入りは最近数年間で最も低く、水深2.5m、5mでは15%前後、10m以深では8%以下に留まった。

〈主要成果の具体的なデータ〉

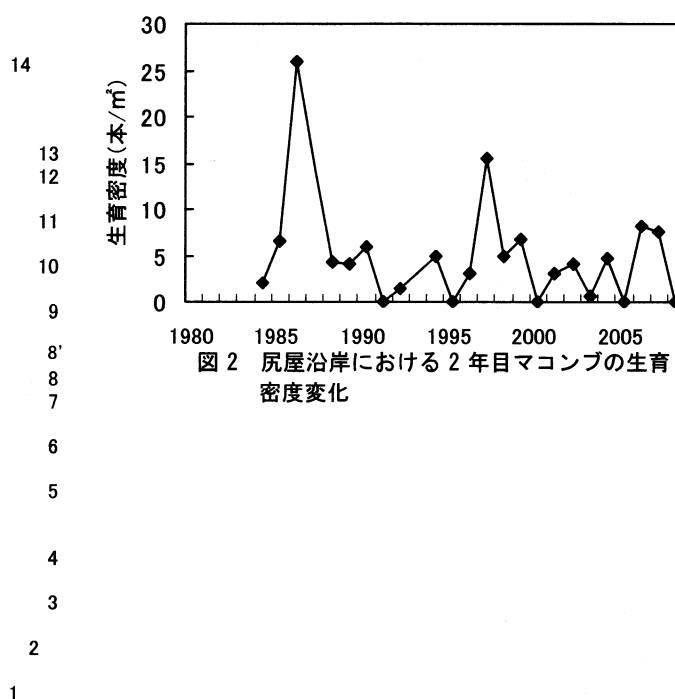
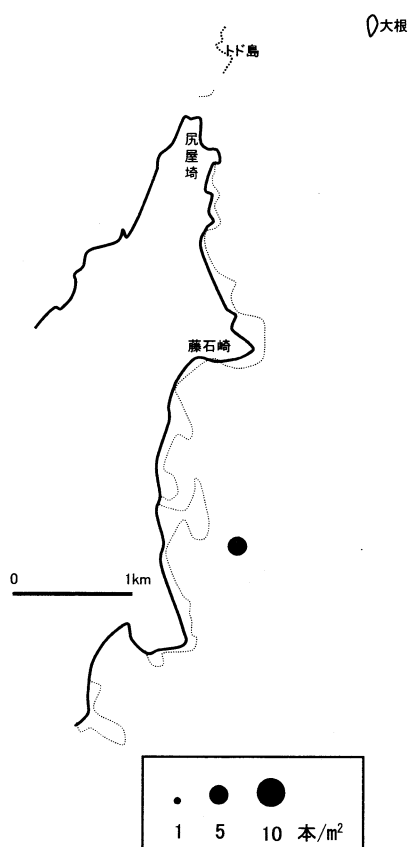


図2 尻屋沿岸における2年目マコンブの生育密度変化

図1 平成20年6月の尻屋沿岸における2年目マコンブの生育密度(本/m²)

〈今後の問題点〉

調査海域では、キタムラサキウニの生息密度が依然高く、資源の加入が推察されたため、磯焼けの発生、持続が懸念された。15m以深に生息するキタムラサキウニは身入りが不良なため、積極的に移植放流する必要があると考えられた。

〈次年度の具体的計画〉

平成21年6月に調査を継続実施する予定である。

〈結果の発表・活用状況等〉

平成20年6月10日の調査当日に、尻屋漁業研究会に調査結果概要を速報として報告した。

平成20年7月に、尻屋漁業協同組合に調査報告書を提出した。